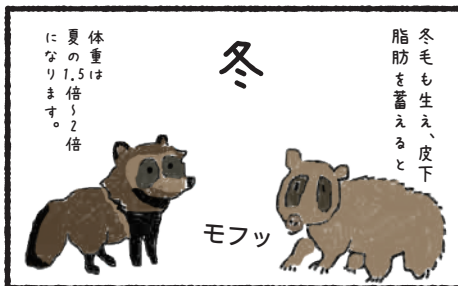


たかおさん

「冬支度」の巻

「のぶすま」最新号とバックナンバーを高尾山山頂にある、高尾ビジターセンターにて配布しております。



作・絵：すえひろ

X(旧Twitter)でふりかえる 高尾山ニュース!

高尾ビジターセンターのX(旧Twitter)・Facebookをチェックしていただいているみなさま、いつもご覧いただきありがとうございます！
山頂の気温や天気、旬な自然情報などを毎日発信しています。
2025年7月～9月の間のツイートから、注目のニュースをご紹介します。

高尾ビジターセンター【公式】

あ、暑過ぎる…温度計は、38.3℃を観測！
でも、これでこそ **#八王子**。
これでこそ、**#高尾山**
※13時時点の高尾山山頂の気温です。
#熱中症注意



2 175 696 13

2025年8月5日は、群馬県伊勢崎市で観測史上最高の41.8度を記録するなど、全国規模で過去に類がない厳しい暑さとなりました。お昼の高尾山山頂の気温を投稿をしたところ、標高599m地点とは思えない、あまりの暑さに大きな反響がありました。

解説員 くらむ vol.43

虫見つけ名人から教わること

昆虫は虫好きにとって永遠のロマン。私は植物が好きなのですが、植物を求めて入る自然の中では度々昆虫に出会うこともあり、昆虫への興味も増しています。珍しい昆虫に出会うと撮影の手が止みません。日に日にあの昆虫に会いたい欲が出てきます。

最近、身近なところに虫見つけ名人がいることに気づきました。その名人は山頂のトイレの清掃員の一人で、ビジターセンターへの通勤途中にミヤマクワガタやアオタマムシなど子ども心をくすぐる昆虫を得意気に見せてくれます。その清掃員は昆虫を求めて山を登っているわけではなく、毎日山頂のトイレを守るついでに人気の高い昆虫を見つけたのが上手なのです。私もその姿勢を見習わなくてははいけないと思いました。

自然の中へ入って目的の昆虫に会おうとギリギリと目を輝かせて殺気を放っていると、たいていの場合は空振りになることが多いです。そのせいか、まだ見ぬ憧れの昆虫がたくさんいます。しかし、経験上、目的を決めずに自然の中へ入った方が意外な昆虫に出会うことがあるような気がしています。私は植物や昆虫の写真を撮っているときが何よりの幸せです。そんな幸せを感じるためには、フィールドへ入るときは欲からくる殺気をおさえて偶然の出会いを楽しむ、気持ちの余裕が必要なのかもしれません。

〈解説員 いしかわ〉

高尾山山頂から発信！

のぶすま

「のぶすま」とはムササビの古い呼び名です。



vol.81 季刊
2025年秋号

ビジターセンタースタッフが感じた

増えた鳥と減った鳥

クロツグミ

クロツグミとメジロは過去の記録と比較して、近年高尾山内で減少しているようです。その原因は不明です。

メジロ

ウグイス

アオゲラ

アカゲラ

コゲラ

コサメビタキ

2000年頃から記録がまばらでしたが、近年は再び営巣が確認されています。

ガビチョウ ソウシチョウ

外来種

兩種共に全国的に増加しています。
高尾山でも毎日鳴き声を聞きます

スタッフ注目の野鳥

都心から1時間足らずで来られる高尾山には、古くから人々によって守られてきた歴史があり、豊かな自然が残っています。今回は高尾山に暮らす野鳥たちの中で、スタッフが個体数に注目している種類をご紹介します。

注目1：増加するキツツキ



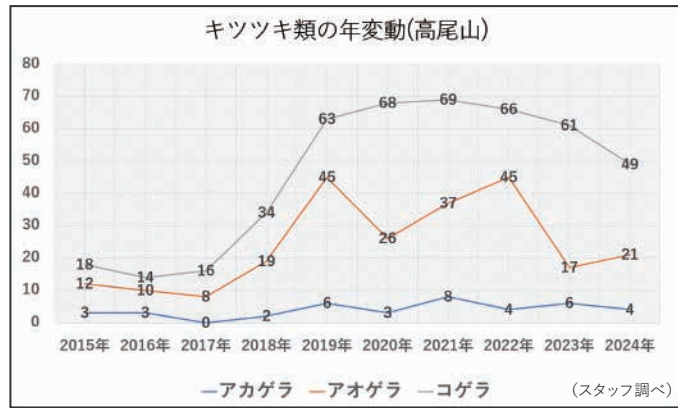
アカゲラ



アオゲラ



コゲラ



キツツキの仲間は、森の大工とも称され、嘴で枯れ木などに穴を開けて子育てをしたり、樹の中にいる昆虫の幼虫を食べて暮らしています。高尾山では2020年頃から*₁ナラ枯れの影響で、枯れ木が増加し始めました。野鳥との出会いは嬉しい反面、枯れ木を叩く彼らの存在は、増加する落枝の危険を知らせるようにも聞こえ、不安が増します。

*₁ナラ枯れ：カシノナガキクイムシが木に侵入した際に、菌類（ナラ菌）を持ち込むことによって引き起こされる木の病気。

注目2：増加する外来種

*₂特定外来生物 に指定されているガビチョウやソウシチョウはペットとして飼育されていた個体が野生化したものです。窓口でも「この鳥は何ですか？」と質問を頂く機会が多く、スタッフも通勤すると毎回のようには声や姿に気づくほど高尾山に多く生息しています。彼らに罪はありませんが、在来種との競合が懸念され、注視している野鳥です。

*₂特定外来生物：外来種の中で、日本の生態系や農林業、人の生活に悪影響を及ぼす恐れがあり「外来生物法」で指定されたもの



ガビチョウ



ソウシチョウ

注目3：シカが増えると減る野鳥



ウグイス



ホトトギス

近年全国的にシカの数が増え、それに伴い景色が変わるほど植物が食べられてしまう被害が確認されています。高尾山周辺でも、2013年頃からセンサーカメラに映りはじめ、2024年時点ではシカの撮影回数が急増しています。現時点では、高尾山内で大規模なシカの食害は見られていませんが、食害の影響が大きい他の地域ではウグイスや小型ツグミ類が減少していることが明らかにされています。これは、巣材として利用するササの仲間がシカによって食べられ、営巣環境が少なくなってしまう結果だと考えられています。またそのような地域では、ウグイスに托卵を行うホトトギスも減少しています。高尾山の野鳥の増減を知るには、彼らを取り巻く森の変化も注視する必要があります。

最後に

動植物の種類が多い高尾山では、「托卵をする・される」といったように、生きもの同士の複雑な関係が、重なり合って生態系のバランスが保たれています。近年、人の手により高尾山にすみ着いた野鳥も確認されていますが、このような外来種は長年保たれてきた生態系のバランスを崩すおそれもあります。本号を通して、高尾山に暮らす野鳥の増減の理由を知り、彼らを取り巻く「高尾山の森の今」に少しでも関心を持っていただければ幸いです。

〈解説員：おざき〉

高尾山の れまし vol.43

養蚕と八王子

八王子と高尾山を繋ぐ糸があります。それはカイコという蛾の幼虫が生み出す絹の糸。八王子を語る上で欠かせないこの糸から、八王子と高尾山の繋がりの歴史を紹介します。

「桑都（そうと）」という言葉を知っていますか？
2020年6月、高尾山を含む八王子市が「霊気満山高尾山」人々の祈りが紡ぐ桑都物語」として日本遺産に登録されました。ここで登場する「桑都」とは、たくさんさんの桑畑と絹の取引で市場が賑わっている当時の八王子地域の様子を表現してつけられた名前です。しかし、今では八王子市に桑畑はごくわずかとなり、絹もほとんど生産されなくなりしました。なぜ昔の八王子は桑の栽培と絹の生産が盛んだったのでしょうか。また、高尾山との関係はどのようなものだったのでしょうか。

元々、八王子は丘陵地帯が多く農耕面積が狭いため、あまり田んぼを作ることができず、農家の方々は様々な副業を行っていました。その中で、カイコという蛾の繭から取った質の良い絹糸が高値で取引されるため、カイコを飼育する「養蚕」が貴重な収入源となり養蚕家が増えました。また、カイコの餌となる桑は丘陵地帯でも栽培が容易だったため、八王子には桑畑がたくさん作られました。戦国時代の八王子城主である北条氏照が詠んだとされる「桑都の晴嵐（せいらん）」では、八王子に広がる桑畑と養蚕の情景と絹の取引で賑わっている市（いち）の様子が詠まれています。江戸時代になると八王子が絹の取引の一大拠点となり、絹に関わる商人達と高尾山薬王院への信仰が深く結びついていきます。

薬王院では蚕を食べてしまうネズミなどから蚕

を守るための「養蚕守護札」を頒布し、絹を取り扱う商人たちがその札を養蚕家の人々に取り次いだことで、様々な地域に高尾山の信仰を広めていきました。絹商人たちは高尾山の信仰の特色である諸願成就の返礼として杉の苗木を奉納する「杉苗奉納」を盛んに行っていたため、絹産業と関係の深い人々の名前が記された石碑や奉納板が残され、現在でも桑都の一端に触れることができます。

明治時代まで生糸や絹は外国への輸出産業の中核となり大きな利益を上げましたが、戦後に化学繊維の普及や後継者不足のため養蚕業は衰退し、八王子でも桑畑もカイコも激減しました（カイコは品種改良された昆虫のため、人がお世話しないと生きていけず、自然の中で目にする機会はありません）。ただ、高尾山には桑が生育し、カイコの祖先と言われるクワコや、天然の緑色の絹が取れるヤマムコという蛾が生息しています。冬になると葉が落ちて木の枝に残るクワコやヤマムコの繭が観察しやすくなるので、杉苗奉納の石碑や桑、蛾の繭の観察を通して、桑都と呼ばれる八王子の歴史に思いを馳せてみませんか？

参考文献

八王子市歴史文化基本構想「八王子の歴史文化 百年の計」
八王子市文化財保存活用地域計画
日本遺産ポータルサイト

〈解説員 やぎぬま〉

解説員の



vol.39



成鳥は白い喉の真ん中の黒線がポイント！

鳴き声は「ピックイーッ！」

トビは尾羽の先が直線

季節で渡りをするタカで、秋は国内から東南アジア方面に向かって長距離飛行をします。高尾山を通過することもあり、雲の少ない晴天の日に視界が開けた展望地にいると、上空を数羽で飛翔する姿が見られるかもしれません。漢字表記では「差羽・刺羽」と書き、サシバが越冬地を目指して空を刺すように一直線に飛ぶ姿が由来となったという説があります。喉の黒線が顎ヒゲみたいでカッコイイ！と思うのは私だけ？

観察場所：山頂（大見晴台）、霞台展望台
観察時期：4月、9月中旬～10月中旬

〈解説員 なかの〉